

先行き不透明？



広島県公立大学法人
県立広島大学 学長
県立広島大学同窓会 名誉会長

森 永 力

「先行き不透明」という言葉は、一九九〇年代後半に軍事用語（VUC A）として使われ、二〇一〇年代に企業用語として広がりました。日本では二〇二一年の中央教育審議会の答申の中に登場し、以後、教育行政の言葉として、当たり前のように使われていきます。しかし、現代は本場に「先行き不透明」なのでしょいか。確かに先行き不透明な状況はあります。感染症の影響で経済が停滞し、企業の売り上げや利益の見通しが立たず、多くの人が不安を感じたり、大企業に比べて経営基盤が脆弱な中小企業では、先行き不透明感が強まると、設備投資や従業員の雇用を控えたりします。これらは、先行き不透明感を感じて、現状維持のアイデアが働くからでしょう。

学との定員割れが目に見えて増えてきました。近い将来、受験生が減少し、大学の再編が行われたり、経営破綻したりすることは、先行き不透明ではなく、明らか事実なことです。日本私立学校振興・共済事業団の調査では、全国の私立大の五十三・二％にあたる三百十六校で、今年度の入学者が定員より少ない「定員割れ」だったことがわかりました。しかし、この値は過去最高の五十九・二％だった前年度より三十八校少なく、五年ぶりに改善しています。事業団によると、定員割れの私大が減った背景には、今年度大学一年に相当する「十八歳人口」が一時的に増加したことがあります。この年代が出生した二〇〇六年は雇用情勢の改善で婚姻数が増え、合計特殊出生率は二〇〇五年の一・二六から一・三二に回復していました。また、少子化への対応で規

模を縮小する大学が相次ぎ、今年度の私大全体の入学定員が一、〇〇〇人余り減ったことも影響したとみられます。二六年度も十八歳人口は増えますが、その後は減少の一途をたどります。

こんな時代の中、本学はどのような方向へ進めばよいのでしょうか。百年の歴史に胡坐をかいている状況ではありません。教育の政策は、社会の大きな変化に対応して作られます。国際的な競争力の強化や異文化理解の重要性の高まりが教育内容に影響を与えます。ICT教育の推進や情報リテラシーの育成が求められます。高齢者の学び直しや多様な学習機会の提供も求められます。個性を伸ばす教育や画一的ではない多様な学びの選択肢が重視されます。教員の業務負担軽減や働き方改革も行わなければなりません。これまでの教育がどのように評価され、どのような反省点があったかも、新しい教育体制を考える際には重要な背景となります。

また、国の中央教育審議会が今年度の二月に今後の高等教育の目指す姿「我が国の知の総和向上の未来像」高等教育システムの再構築」の答申を出しています。その中で、育成する人材像は、持続可能な活力ある社会の担い手や創り手として、真に人が果たすべきことを果たせる力を備え、人々と協働しながら、課題を発見し解決に導く、学び

続ける人材とされています。また、地域も含めた成長分野における人材育成の強化も打ち出しています。意欲ある大学・高専が行う、デジタル・グリーン等の成長分野への学部再編等の改革を促進するとして、すでに百二十六大学を財政的に支援しています。また、高度情報専門人材の確保に向けた機能強化にかかる支援も八十九大学に行っています。本学もその支援を受けて、来年四月から情報学科を立ち上げます。本学が百年先も生き残っていくためには、教職員一丸となって立ち向かっていかなければなりません。同窓会の皆様におかれましてもこれからも温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

